

礼拝さいこう

賛美歌からの学びあい・交わりが豊かにされて

Index

- 1) 巻頭言 わたしたちが「共に歌う」ために 山下真実 (ふじみ野)
- 2) 日本賛美歌学会第19回大会に参加して 主題「いたみに向き合う賛美歌」・笠松絹子 (南光台)
- 3) 「奏楽ってこわくない」中国・四国連合音楽研修会報告 杉山いずみ (徳島)
- 4) 「賛美歌をぼーっと歌っていませんか？」NCC教育部研修会分科会報告 山口千幸 (東京北)
- 5) 2～3の教会が集まって！奏楽講習会を！ 踊真一郎 (久留米)
- 6) 「由木康とその時代」日本賛美歌学会関東支部会研修報告 上杉道子 (大泉)
- 7) 北九州地方連合研修会の取り組み紹介 美登恭子 (高須)
- 8) 教会音楽祭報告、賛美曲紹介「すべての恵みの」 (新生讃美歌563番) 山中臨在 (品川)
- 9) タンバリン・ダンスに出会って (教会音楽祭) 持山優子 (相模中央)
- 10) 違いを越える祈りとしてークリスマスの取り組みー 松坂有佳子 (八戸)

～巻頭言～

わたしたちが「共に歌う」ために

山下真実 (ふじみ野)

礼拝における、世代を超えた賛美(歌)を考えると、「若者」「ユース」と結びつきやすい言葉に「ワーシップソング」や「プレイズソング」、「賛美集会」という言葉があります。それらの言葉が表しているものには幅があり、とても曖昧に使われている言葉ですが、ほとんどの場合、伝統的な「賛美歌」や礼拝の在り方に対して、新しいものとして取

り上げられることが多いように感じています。皆さんの身近でも、子どもたちや「若者」たちと、世代を超えて一緒に礼拝・賛美を共にささげたい、そのような願いから、それらを教会・礼拝(式)に取り入れようという動きがあるかもしれません。

ただ、この「ワーシップ」「プレイズ」「賛美集会」という事柄に対しての“批判的

な”意見として、「音楽や歌詞が単純」「内容が薄い」「繰り返しが多い」ということを耳にすることがあります。歌詞の内容に関していえば、そこには他言語から日本語への翻訳ということにおける限界性も現れているのですが、私はそこに「賛美の歌を共に歌う」ということがらについての、大きく2つの考え方と、そのあいだにあるジレンマが存在すると考えています。

賛美の歌を共に歌いたい、初めて歌う人とも、子どもたちとも、歌うことが苦手な人とも…そのように願うとき、用いる賛美の歌の音楽や歌詞は、なるべく平易なものが選ばれる傾向にあるでしょう。訓練された聖歌隊にしか歌えないような歌や、一読しただけでは意味内容がわからないような歌詞の歌は、作りにくい、選びにくいという現実があります。「賛美集会」といわれるような新しいスタイルの礼拝・賛美の場で、覚えやすい音楽や平易な歌詞の賛

美の歌が選ばれやすい傾向があるのは、このような要請や配慮が背後にあるものと思われる。

逆に、あるテーマやメッセージを大切に表現したい、内容を大切に伝えたい、分かち合いたい…そのように願うなかで、賛美の歌の音楽性がより芸術性の高い複雑なもの、歌詞の内容もまたより多く、深いものとなっていく場合があります。そうすると今度は、その複雑さや内容の深さ故に、その歌を「共に歌う」ということの難しさが生じてくるかもしれません。

音楽性や歌詞の内容を重視することと、共に歌うことができるために配慮すること…私たちが生み出し選び取っていく礼拝・賛美(歌)は、いつもその狭間に——共に神に賛美の歌をささげようとする「わたしたち」の間にあるのです。

日本賛美歌学会19回大会に出席して

学会大会主題『いたみに向き合う賛美歌』を受けて

笠松絹子（南光台）

9月16日、日本賛美歌学会第19回大会～主題『いたみに向き合う賛美歌』が日本キリスト教団仙台北キリスト教会で開催されました。痛みに向き合う賛美歌とは何か？人の心の嘆きや苦しみ、あるいは共同体の苦しみ、いたみなどに賛美歌がどのように機能し、存在するのかに焦点をあて、日本バプテスト連盟、日本基督教団、聖公会、カトリック教会、各教派で歌集の編集・改訂に携わっている担当者からの発題がありました。



江原美歌子宣教部教会音楽室長は、「いたみに向き合う賛美歌」～『新生賛美歌』で何が歌われているかを発題され、「いたみ」の「痛み」「傷み」「悼み」の意味について触れられ、「傷（きず）」を用いた「傷み」（いたみ）の賛美歌のことばが、この時代にさらに求められているのではないかと等、語られました。『新生賛美歌』で歌われてきた「いたみに向き合う」賛美歌を整理

中国・四国連合音楽研修会報告

「奏楽はこわくない！」

杉山いずみ（徳島）



9月16日（月）に恵キリスト教会を会場に中国四国連合の奏楽者研修会が行われました。6教会から20名が参加してくださいました。初心者が参加しやすい研修会にしようとテーマは「奏楽者始めました。～喜びの賛美を献げるための隠し味～」とし、連盟教会音楽室より初心者向けに優しく指導してくださる講師ということで美登恭子氏（高須教会）をご紹介いただきました。明るいキャラクターと軽快なお話に、奏楽技術の

未熟さを厳しく指導されるのではと、緊張感を持ってきた参加者たちもほぐされていきました。

技術面に不足を感じると、「思うように弾けない」「間違えてしまった」その事ばかりに気を取られてしまいがちですが、「賛美を献げる心が大事」「間違えたって大丈夫」「楽譜にある音を全部弾かなくても大丈夫」「メロディーだけでも大丈夫」という美登さんの言葉に慰めと励ましと勇気をもらいました。

今回の奏楽者の中にはピアノ、オルガン、エレクトーン、キーボード奏者の他に、「いつかサックスで伴奏をしたい」と10年練習を積んできた壮年、学生時代にフルートをがんばっていた姉妹、「オカリナで賛美したい」というバプテスマを受けたばかりの姉妹、またホルン練習中の中学生もいました。開会礼拝、閉会礼拝ではピアノにサックス、フルート、オカリナで伴奏がなされ、豊かな賛美が献げられました。

諸教会の賛美が豊かになることを願うと同時に、連合の集会での賛美も豊かに心から喜んで献げられるようになることを願っています。今回出会えた連合の奏楽者の方たちと励まし合い、祈り合い、共に奉仕をする仲間になっていくことができればと願っています。

しつつ紹介され、教派を超えた参加者と共に歌うことができたことは大変有意義でした。

また、これまで自分が知らなかった各派の賛美歌・聖歌も知ることができ、賛美歌の広がりや深みを感じ、共に学び、共に歌う機会があたえられたことは恵みでした。

閉会礼拝では、東日本大震災を覚えて、東京電力福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染被害をうけた方々、また、すべての被造物を覚えて、共に祈ることができたことも感謝でした。

今回参加して、歌に特別な思いがあることに気づきました。私は以前、重い障がいがあるお子さんに関わる仕事をしていました。出会ったお子さんたちは、歌や音楽が好きで、「歌いかけ」にすてきな笑顔を返してくれました。日常生活で医療行為を必要とするお子さんは、時には息をすることが苦しくなる、体の筋緊張が強くなると、さらに苦しくなることがありました。そのような時、歌いかけられると、ふ～っと楽になったり、体と心がやわらいでいく姿がありました。

ひとりひとりのかけがえのないいのち。いのち輝かせ、共にいきる、賛美しつつ・・・、賛美歌のみなもとは祈りであるとあらためて思われます。

NCC教育部研修会 報告

「賛美歌をぼーっと歌っていませんか？」

山口千幸（東京北）

9月15日と16日、NCC教育部主催「第4回教会教育フェスティバル」に参加しました。

15日の分科会は、日本バプテスト連盟江原美歌子室長の「賛美歌をぼーっと歌っていませんか？」を選びました。

教会に通い始めた頃には、聖書に出てくる「石女（うまずめ）」という言葉に傷つき、賛美歌の「罪人」という言葉に、救われた「こちら側」と、まだ救われていない「あちら側」という「上から目線」を感じていた私でした。しかし現在、奏楽者として賛美歌を選ぶ時、会衆として歌う時に、その賛美歌の表面だけを見て、なんとなくわかったような気になっていないか、言葉に対する感性が鈍っていないか、思い当たることがありすぎる。これはちゃんと叱られなくては！そんな気持ちが参加の動機でした。

分科会では、いくつかの賛美歌を例に、歌詞の意味や言葉が誰を指しているかが具体的に示され、また著作権や賛美歌の歌い方などに対し自分がいかに無感覚であったか思い知らされました。その後、そもそも何故ぼーっと歌ってしまうのか？の考察、そして対策を話し合いましたが、その中で示された「賛美歌の方向を知る」という考え方には、賛美歌を理解するための気づきが多くありました。例えば人から神に向かう方向には、頌栄、賛美、祈り、感謝、嘆きなどが。神から人に向かう方向には、み言葉、愛、招き、祝福、赦しなど。そして人から人に向かう方向には、伝道、証し、交わりなど。この人から人に向かう方向の賛美歌の中に、知らない人に

教えてあげようという「上から目線」があるように感じました。



賛美歌の言葉そのものが他者への配慮を欠き、誰かを傷つけていないか、また時代の流れ、出来事を受け、今の賛美歌に相応しい言葉は何か、賛美歌集編纂のサイクルが平均25年ともいわれる中で、常に賛美歌の言葉に向き合うバプテスト連盟の賛美歌検討委員会の働きも知ることができ、ぼーっと歌っている場合ではないと、しっかり叱られた充実の2時間でした。

新生讃美歌ブックレットを活用していますか？

上記の研修会では、「ぼーっと歌っていませんか？」の視点を、「新生讃美歌ブックレット」からたくさん紹介していきましました。みなさんはこの歌詞の意味を理解して歌っていますか？

301 「いかなるめぐみぞ」 4節 「いよよせちに」・・・→「新生讃美歌ブックレットP82」

431 「いつくしみ深き」 1節 「などかは下ろさぬ負える重荷を」・・・→「新生讃美歌ブックレットP86」

435 「山辺にむかいてわれ」 2節 「まどろみねむりまさじ」・・・→「新生讃美歌ブックレットP86」

2～3の教会が集まって！奏楽者講習会を！

教会音楽専門委員 踊 真一郎（久留米）

9月15日（土）、教会音楽室の「奏楽講習会支援」を利用して、久留米荒木、鳥栖、久留米の3教会で「奏楽者研修会」を行いました。

発端は久留米荒木教会で奏楽を中心的に担っておられる方が継続できなくなる可能性が浮上し、奏楽者育成が急務となったことです。3教会はここ13年、卓球大会から小学科の合同プログラムや交換講壇と、交流と協力の幅を広げていたため、すぐに2つの対応を考えました。1つは二ヶ月に一度、久留米から久留米荒木に奏楽者派遣と礼拝後のミニレッスンをを行うこと。もう1つがこの合同の奏楽者研修会です。各教会でも新たな奏楽者が起こされるように、「はじめて鍵盤を触ります」という方も参加可能で、定期的に継続できる研修会を企画しました。久留米荒木のニーズに沿ってのピアノ研修でしたが、参加は普段から奏楽を担当される方から「〇十年ぶりに触る」「奏楽は全くしたことが無い」「まずは右手から」という方まで多様な8名でした。

講師は筑紫野二日市教会の加来陽子氏。初めに「礼拝における音楽のはたらき」「会衆賛美について」「奏楽者としての心構え」の講義、模範演奏、実技という研修会でした。

印象的だったのは「演奏家にとっては楽譜通りに弾くことは大事だが、奏楽者は礼拝に仕える働きだから、皆が歌いやすい奏楽を大事



にする」と教えられたことです。その観点から模範演奏では、楽譜から音を減らしても良いことや、歌詞を意識した演奏、会衆の息継ぎを意識して音の強弱をつける実演（ペダルの踏み方）等がなされ、参加者からは感嘆の声が上がっていました。

実技は、それぞれの技術に合わせて「今度はこれを加えてみて」「これを意識して」とのアドバイスをいただくのですが、これがとても適格で、参加者はアドバイス前後で自分で驚くほどの変化を味わっていました。子どもたちが走り回るような環境だったためか、子育て中の方々も安心し、忌憚のない質問も出ていました。「次は他の人も誘います」「礼拝の一曲からでもチャレンジします。」と参加者から感想をいただきました。

今後、研修会は二ヶ月毎に続ける予定です。協力伝道は多様な可能性を秘めていると感じています。みなさんの教会でも、お隣の教会と声をかけあって、研修をはじめませんか？

※教会音楽室では奏楽者講習会の開催を支援しています。支援は1年に上限3万円ですが、今後、持続して研修会が開催できるよう、教会の取り組みを励ましています。ご検討される場合、048-883-1091（代）までお問い合わせください。近隣の講師の先生をご紹介することもできます。



日本賛美歌学会関東支部会

「由木 康とその時代」

講師：日本基督教団千代田教会 戒能信生

上杉道子（大泉）

由木康の牧会した日本キリスト教団東中野教会を会場にその信仰と膨大な偉業について多くのことを学ぶ機会が与えられました。昭和世代のものにとっては教団『讃美歌』から由木康作詞・訳詞の数々の賛美歌が信仰の伴侶として常に口ずさまれています。1000を超えると言われるそのほとぼしり出る信仰の詞の豊かさと表現的確さは驚くばかりです。

日本の賛美歌編纂史の上で由木康の果たした功績はあまりにも大きいものがあります。関西学院在学中19歳にして『聖書唱歌』を刊行、『日曜学校唱歌集』（24歳）、1931年『讃美歌』、1941年『青年讃美歌』、現在日本のキリスト教会の多くが愛唱している教団『讃美歌』は1954年に由木康編纂委員長のもとで刊行され、その後1967年発行の『讃美歌第二編』へと引き継がれます。

訳詞の中で最も有名な「きよしこの夜」では、戒能信生氏はドイツ語の原詞からの直訳を試みられ、由木康訳の見事さを賞賛されました。Silent Night, Holy Night(英訳)がなんとわずか7文字に収められ、いかなる日本語もこの7文字には及ばないのです。「馬槽のなかに」は個人的には学生時代のチャペルでたびたび歌わ

れ、信仰への導き手となった賛美歌です。この詞について「1923年作者は近代神学の影響を受け、イエスの神性について思い悩んだ結果、それがイエスの人性のうちに包まれ、それを通して輝き出ていることを示され、一つの確信に到達した。この歌はそのときの心境を自由詩に表現し「この人を見よ」と題して昭和6年版『讃美歌』に採用された。」とあります。（「由木康生誕100年記念誌」1996年東中野教会編より）

由木康の業績は賛美歌編纂にとどまらず著書・訳書は膨大な数に上ります。若くして『和英辞典』（現『スタンダード和英大辞典』の原型）の編集に関わったほかドイツ語、フランス語にも精通。日本におけるパスカル研究の第一人者でもあります。

編集に関わっていた1930年創刊（～1942年）の『新興基督教』は、世界情勢に危機感をもち神学研究がなされたもので、創刊年に書かれた『新生讃美歌』389番「昔主イエスの播きたまいし」3番「時代の風は吹きたけりて」の背後にある由木氏の姿勢を知ることができました。一方で、戦時下の讃美歌編纂委員会との関わりや、戦後、戦時中の賛美歌編纂について見解を表わさなかったことについては、諸説語られ興味深かったですが、推察によるものだったため、この紙面での報告は割愛させていただきます。（資料は教会音楽室にお問い合わせください。）

東中野駅にほど近い商店街にひっそりとモルタル平屋の「桜山教会」（現東中野教会）がありました。当時桜山町に住んでいた私はその前を日常的に行き来し、日曜学校にも何度か足を運んだ記憶があります。半世紀をとうに経ていま東中野教会の前に立つとあのなつかしい「桜山教会」の香りが漂ってくるようでした。



東中野教会会堂と由木康の書「この人を見よ」

連合 研修会の取り組みから

北九州連合は毎年研修会を開催され、連合外から講師をお招きしての研修会を重ねられていましたが、今回は、連合内の賜物が生かされ、学びあう形で開催されました。いろいろな研修会の形があることに気づかされます。ご参考ください。

北九州地方連合 礼拝音楽研修会 報告

北九州地方連合教会音楽委員長 美登 恭子（高須）



去る9月23日（月・休）、北九州地方連合ではシオン山教会で礼拝音楽研修会を行いました。

7年ぶりの実技の研修会で、講師に遠方から来て頂くのは予算上も難しく、連合内で出来る、聖歌隊、リードオルガン、ピアノ、プレイズ（ワーシップ）ソングの4つのクラスとなりました。連合だけでなく全国的にも知られている方が講師と決まりましたが、「地方連合で自前で4つものクラスを持てるなんてあまりないこと。」と他連合の方から言われ、礼拝音楽でもとても人材に恵まれている連合だと言う事に気づかされました。

開会礼拝後、午前中1時間半、午後1時間半の実技研修で、聖歌隊は、講師、伴奏者を含めて20名の方が、講師作曲の曲を中心に派遣礼拝での賛美を目指して研修が始まり、発声は基より、歌詞の意味を考えながらいかにそれを表現するか、また、お互いを知って祈り合う時ともなったようです。

リードオルガンは講師を含めて5人、ピアノも4人と充実した時となりましたが、オルガンクラスは、少し分解して自分でもメンテナンスが出来るように楽器自体を知る時ともなりました。（写真↓）

ピアノは、奏楽者としての心得、そしてそれぞれに弾いて頂きましたが、ある方は、奏楽を牧師先生が説教と並行してされる時もあり、年末頃には頌栄や後奏だけでも自分が出来ないかと独学で練習を始められたと聞き、教会の事情や奏楽歴は様々ですが、会衆と一緒に、会衆に仕えて賛美するにはと言う事を考えながらの研修となりました。

プレイズ（ワーシップ）ソングは、情報交換や興味のある教会の方が少し体験できればと準備し、講師含め9名の方々がこれまでの流れを知り、講師のギターに合わせて楽しく体験ができたようです。

それぞれの研修が恵まれた時となったことと、4つもの研修が同時に出来る教会があり、講師が備えられている連合であることを改めて気付かされた機会ともなりました。



有志聖歌隊賛美と新生讃美歌563番「すべての恵みの」

山中 臨在（品川）

有志聖歌隊指揮者

10月5日（土）に、青山学院大学ガウチャー記念礼拝堂（東京）にて、「第34回教会音楽祭」が開催されました。「教会音楽祭」は1968年に日本キリスト教団東京教区、カトリック、ルーテル、聖公会の4教派が集まり開始したもので、今回は8教派の参加があり、青山学院管弦楽団、短大ハンドベル、幼稚園年長組有志の賛美も加わり、豊かな賛美プログラムが導かれました。テーマは「旅」。聖書の中の「旅」や信仰の旅路に焦点をあて各派が賛美歌を選び、それぞれ「旅」を通しての「主の伴い」「守り」「励まし」「希望」などが歌われていきました。バプテスト連盟は有志による聖歌隊100名が集められ『新生讃美歌』563番「すべての恵みの」（連盟発行の聖歌隊用の楽譜04-7）を賛美しました。

この賛美歌の作詞者ロバート・ロビンソンは、1735年イギリスで生まれました。8歳の時に父親が亡くなり、貧しい家庭環境にあったことから彼は14歳の時にロンドンで理髪師となるべく奉公に出ましたが、そこで悪名高いギャング集団と交際するようになり、放蕩の生活へと

身を落としします。17歳の時に、ギャング仲間と共に、クリスチャンを馬鹿にして集会を妨害するために出席したキリスト教の伝道集会で、ジョージ・ホイットフィールドの説教に心を打たれ、悔い改めてキリストに立ち返る思いが与えられました。後に彼はメッセンジャーとしての召しを受け、バプテスト教会の牧師となりました。

ロビンソンは23歳の時に、この賛美歌の詞を書きました。「浮世の旅路に迷える我を、さまよいいでたる我が魂を、イエスキミあがない救い出したもう」とは、ロビンソン自身が歩んで来た人生の中で与えられたあかしです。暗闇から救い出してくださった主イエスを「ハレルヤ！」と賛美して歩んでいくというロビンソンの信仰を受け、この聖歌隊用の編曲では「われらを新たに造りたまいて、大いなる救いに導きたまえ。主よりの冠をたまわる日まで、み栄のうちに歩ませたまえ」という祈りの歌詞が最後に加えられています。新たに加えられたこの歌詞は、新生讃美歌19「くすしき主の愛」の3節

を引用しています。ミーターが同じである（共に87 87 D）二つの賛美歌がこのように融合したことにより、「私の」祈りが「私たちの」祈りへと広がっていきます。

さて今回は、この賛美にタンバリン・ダンスが加わりました。教会音楽祭では、「日本の教会音楽のあり方を模索する」ことが目標



の1つとして掲げられており、バプテスト連盟は教会音楽祭の実行委員でもある江原美歌子氏の声かけにより、毎回新たな取り組みをもって賛美に臨んできました。タンバリン・ダンスについては、下記の報告をご覧ください。

タンバリン・ダンサーの躍動感溢れるリズムと動きによるリードによって賛美がはじまり、聖歌隊賛美の最後には、流れるようなタンバリンの鈴の音とともに、「すべてのもとなるイエスよ」と声をあわせ、共に祈り主を賛美することの豊かさと恵みと励ましをいただくことができました。

タンバリン・ダンスに出会って

持山優子（相模中央）

「すべての恵みの」の賛美をバプテスト連盟有志聖歌隊と共にタンバリン・ダンスで賛美する、それも「教会音楽祭」で！「タンバリン・ダンスに挑戦しませんか？」とお誘いを受け、今までまったく知らなかった私は、溢れる好奇心を胸にメンバー5人と一緒に初めての練習場へ向かいました。講師は日本バプテスト同盟の渡邊さゆり氏。タンバリン・ダンスをバプテスト同盟の教会内外で賛美し演じられ、その神学と歴史と意味を大切にされつつ、普及に力を注いでいらっしゃいます。

タンバリン・ダンスの原点は、出エジプト記15章にあるイスラエルの民の賛美の隊列を、小太鼓＝タンバリンをたたきミリアムと女性達が踊りをもって先導したことにある、と教えていただきました。タンバリンという楽器のそもそものは、動物の革をなめして作られるもので、命を寿ぎまた悼む賛美に用いられたということもはじめて知ったことでした。興味深かったのは、踊りの型です。それぞれの型に意味があり、例えばタンバリンを縦に持つとシンバルがロウソクの意味に、それを左右に大きく振ると聖霊の流れを表すのです。このような型を用いて、渡邊先生が賛美にふさわしい振り付けをして下さいました。音楽祭本番では有志聖歌隊の最前列で踊りましたが、波動となって流れ出す圧倒的な賛美に背中を押していただき、みなで賛美を踊りきることができました。賛美にはもっともっと大きな可能性があるのだと感じました。

タンバリン・ダンスは群舞が基本。共に踊りを担い賛美することによって一つとなる。ここに意味があるそうです。他教会の姉妹方との出会いをいただき、練習と交わりを通して心を合わせ一つとなって賛美をお捧げする素晴らしい体験をさせていただいたことを、心から感謝致します。

（筆者：右から2人目）



聖歌隊楽譜 新譜紹介 聖歌隊楽譜の新譜を2曲発行しました！

● 新生讃美歌363「キリスト教会の主よ」（19-1）

作詞：ティモシー・ダドレー・スミス、曲：イギリス民謡、編曲：江原美歌子

ユニゾンが中心で、2節は旋律に加え、同じモチーフ「聖霊来てください」を繰り返し歌い、3節は、和声進行と共に「われらを導きたまえ」を力強く賛美していきます。

● 新生讃美歌570「たとえばわたしが」（19-2）

作詞作曲：野中宏樹（鳥栖）、編曲：十時節子（東京第一）

4声の編曲ですが、メロディーのみや2部（女声）でも歌うことができます。前奏、間奏のハーモニーは、リコーダーやフルートなどで代用することもできます。

違いを越える祈りとして—クリスマスの取り組み—

松坂有佳子（八戸）

青森県八戸市には教団・教派を越えて協力して宣教活動を行う伝統が明治の時代から確認できます。詳しい資料がほとんどありませんが、長く厳しい冬に閉じ込められるような地理的な環境に加え、戦争や飢饉や地震などに何度も見舞われながらも少数者として信仰を保とうとする中で、それぞれの多様な歴史や背景を尊重し合いながら、違いを越えて協力し祈り合うことの意味や意義を見出しながら歩んできたのではないかと推察することができます。

今回はそんな八戸で続けられている「八戸市民クリスマス」のプログラムを紹介いたします。今年度はプロテスタント12教会、カトリック2教会が実行委員会を組織して協力しています。テーマは「クリスマス音楽礼拝—いっしょに歌おう世界のクリスマスキャロル—」で、キリスト教が神を賛美する歌声と共に世界中に広がり、今日では世界各地の音楽に乗せて、その土地の言葉で、たくさんの賛美歌が作られ、歌われるようになっていることを身近に体験するプログラムを目指しています。『讃美歌21』『聖公会聖歌集』『新韓日讃頌歌』また我らが『新生讃美歌』など各団体が用いている讃美歌集の中から世界各国で作られたクリスマスキャロルを選曲し、このプログラムのために結成した聖歌隊を中心に、オルガンやトーンチャイム、ホルンなどの演奏も加えて、クリスマスの物語をたどる構成になっています。ちなみに『新生讃美歌』からは678番「マブハイ！祝福」を用いることになりました。



昨年の八戸市民クリスマスの様子

またカトリック教会に集うベトナムの方々が見地語で「きよしこの夜」を歌ってくださることになりました。たくさんの移住労働者が市民として八戸で暮らしておられます。自分の故郷を遠く離れて働く人たちが、安心して礼拝し祈ることができる場所として、わたしたちの交わりが開かれていくようにという祈りを込めて準備に取り組んでいるところです。

（第19回八戸市民クリスマス実行委員会・委員長）

第14回礼拝音楽研修会のご案内

第14回礼拝音楽研修会は関西連合との共催で開催されます。関西連合、近隣の地域には、第1信を11月20日の全国放送にてお届けいたします。対象は音楽奉仕者のみならず、すべての「礼拝」に参加する信徒の皆様です！「礼拝」の学びを大切にしつつ、実践としての午後の「賛美フェスティバル」では、共に賛美を通して主を喜び祝います。「賛美フェスティバル」では、教会またはグループの賛美による参加を募集していきます。詳しくは教会音楽室までお問い合わせください。

日程： 2020年3月20日（金）10:30～15:30

場所： 日本バプテスト大阪教会

テーマ：「主を喜び、祝おう」

午前：「礼拝の学び」「子どもと共なる礼拝」、分科会

午後：「賛美フェスティバル」

礼拝を豊かにするための学びあい、主を喜び祝う賛美の時、どうぞご参加ください！